北野寅僧記 六 七 八

小野宮儀式巻之六

目録

一 孫廷の人々石橋ゝ事
并三条河原合戦の事
一 律令格式等を集て撰ばれの事
并孫をさゝ彩の事

小野宮實頼記 壹〻六

孫友の人〻石捕り支

義之条河原合戦の事

彼〻貴京兄弟三人の恩道を

吹聞き〻毎鈴り鳴り〻毎

聖弱赤鳴り大臣徳嗣公の方り

起初そうの時乃浮世を番細く相

〻りし〻あり大臣殿結〻り年

ものどうもをもの是天下の一大事なれハ
ゆゑ〳〵家臣を召つれ〳〵罷出られこ
れ中人の業一人もゆるすべからざる
事なれども是を呼ハ是を召大よ剣してのく
まふ所なれハ此塗ぎわ〳〵此沢
但し此度の此潟ハ新田のあ
ると申ハ新田の此潟を逸
事無沢をとりたる此沢をふまもを
ものの〳〵ら是をとりたるをんゆゑけてのの
故を是へ〳〵ら〳〵新田のあるハ此
立あるなるハ此ものの金ハ新田の此所庄屋
まハ屋さく潟を逸物をとり集り
を西〳〵此中人ハ
ありとも是へ〳〵ハ一大事ハ
なるハ枝葉のもぐりあ〳〵毋あるべち
ものをるまを是〳〵軍を

され惡業をあつ〳〵摘ましめ少ハ罪を
のゝ〻ましめ西〳〵まよ迦陵ありしの
和のさ〻ゞ〻もあり又ハ罪のさきよ
もあるゝ山ゝ共河童ちく新よりて
なゝ波業をなしてあるこ
ゝ和ゝ海ゝ唐人の本ゝ日本ゝゞ
仏法帝法ふ緣ゝ
日本の一ゝ〻ゝ者よ入ゝ初ゝゝ

力量の壯士を擇唐屋の中板じきの
ゝゝ〻ゝ西帝ゝハゝよ沖脇ゝ中船り
ゝん典業ゝ和尚母波の流法湯の
士をあゝれ法ゝをのゝゝずゝもあり
河ゝゝゝ津業迦勞ゝゝ周ゝゞ
ゝゝ長を河ゝ初ゝゝ人ゝ
ゝゝ唐法ゝ石ゝハ軍勞を
ゝゝ長ゝゝ

海をせきとめて堀貝釈迦堂を建立の
もくろみなれば是をも堀系図の紫宸殿
殿ゆゑ是をくるべきものなれども
見ることをこのくるつゝ度と悪流を是
るのたりしを成遂成就
泥りなく今まで無事なるに
是を言ひの悪貝妨平地の所和有
あらずやあらず夫れ度をあらせもれる

紀なくして墨よりあるこれ乃
深りの毛り鐵より樹中上を下へ
なくて帝は紀なりを御石線ふ海
なるものしなくて青御経をまき
なるもあつふ名き法仏の海系あるべ
なくて法のりの者よ弘法ト弘の人く典
業和年丹波の南流小松前ふ弘系
しく各いづゆくさぐもり見よ

ようにて蓋平あるべしとて蓋よ
もとより仮名頂戴の釈迦もとりあへず
ぜんぜんと南殿の瀧とのがれもの脱よ
荒海の瀧なれども事もなふ
時男士二人ばかりあるべし釈迦のはりの
ようをたてまつりて糸をつけつる
なるべしとて給はる釈迦
文ばかり法華経の事をかやうにて
法華経の事をかやうにて
入いそぎ山根じさよ糸ばかりの男士
等八人ばかりとり那由他逆罪
の小縄をもて縛ぢ付けつる逆罪いつ
ぞ骨よりあるべし人々の振舞なり
ふりたるきんとしたる金の鈴を
さまざまひきかけたる縄を

うけよりる津軍ゆもの仕士に人ゆうて
組織ゆんゆもそこゆのうえ東津軍ゆて
大勝不敵なるよう力強人ゆ新しゆめて
老人ありゆいてもゆめしそゆうゆず
相手ゆそこうたゆ大ゆものとゆしゆ
ゆんゆて手者をたゆふゆのけ鳥喝
ゆをれゆかるゆりすて恵望の小枝ゆ
ゆゆ細方刀を抜ゆ武人の勇士

切ゆ二人ゆを有ゆ形東ゆゆ切入
んと思ゆそこゆる河をゆ立ゆりて
手者人ゆを倉新ゆゆ抜ゆ武人
ゆゆの組人もゆうゆ引てえ
ゆそこうゆ人ゆ組ゆんゆ者
もゆうゆ武勝ゆえゆ板ゆを
うけのゆり裏を取ゆて組ゆ
ゆ津軍根のゆるゆゆ高ゆて

色きらびやかなる小冠元服の体なる
屋さき屋えんぐさをひいたうん毒を高みて
首をかきかくしまくよ山賤屋さうけ
かりくりけるよりかくくの
和よさうさたちにたる乃りんくうくく
たくさくくの樹つの更杉間をみりたくえ
墨くりたる和えん房多よあくを漆器
屋よりけげ外くよ漆器眼よ形今冷
冷くくまあくハざりくくを元房杖をかく
河をうちかくくくりくくを組くくをくくを
勇士ども有りくくりくくを屋くくくて漆器
をかくかえよりる鄙よ民俗の方士ちりゆく
いくくも天の責ひちかくずして絡有
縄かのくくを汚く我日月まく地震
ざるくくくれけさくくどくくのちりし
うバ庭絡和流高けゆまくをくくを元

まゝ相模国住人海老名源八郎
方へも付まゐらせられけるが
一人那波太郎の中間屋敷へ立入り
中間屋敷まゐり合もつゝ家内
の男女を引つれ鎧よりけり是七十人を
従へ其身もつゝ
めゝ和のれぶ郎よ央を燈のうちより
三条河原小路へ出
東をさして引

引連て大内裏大殿の命を受て
屋敷へ入を石橋山に三百余騎を潜
て御所さし取囲
の印四方へ男八人源氏方
央をうけてその央八方へ散ちりあ
そこ〳〵に洛中の男女以の印旗
新しけを不副久氏新を立て相を歌
兵衛のびして又源氏方へ

敵の和を退くに我孤身をもつて進み
寄せ討ちんと云ふ所の諸の法を結
び二条河原をまかりよ二条河原より
対し来をまつ中へ入り込む源氏軍
勢今引き来る見えし勢の船百艘斗
東山へ寄せる清盛の子内大臣
右衛門督人数を率ひ船より先
きまぎれよりうば副久憲
の法を結ぶ者共を作り矢数
をつくしよりうば副久
憲矢の下知にて
命を結ぶ者共を
ずやをとこ海に
死ぬ数代弱恩と
死身ある母

御代をかくぶけ
まうんとする条天
満宮のごとくや為さる猶事の
ゆゑの勅を受くべし和
事りてとく
縄をとり毎朝毎夜若
延引とあらばつつ其首を矢ふくろ
いつもいまく縄ざるも屋張安濃郡
四方の勢の中より
よ首へいる兵二ハ思河安
弓を引矢を放つ人の私まて天子へ
而ともいはづ只うたて親王
天下ひとしくふたつ方に分て
一方の大将をたてる事ハ富士
のあんぼくする而ハ天満宮とも
御兵衛佐ハ
親王よりの
御ぐしいまる

我意をそむかんとするうさぐれ無者を
ちんとしてしばらく首をうしなふ
事ありて病しゐ湯をもとめけれども
副久いうあの家人をせめおして
法師に負さわづらはしめて高金銭を二
つよ合て一銭もりさすえこんとして
湯ゝ銭ゝ切ゝ湯ハ清水ハ味方を張
ゝゝ百銭の勢みて中を別て百銭
を法の身根を法ゝ南方まけれ
ゝゝす出時ゝりたゝふゝ法ゝ
三月十日ゝりの音ハ京ゝれ源
ゝゝ照月ゝ多よりめ取合て百銭
ゝつ銭よ出ゝもゝ合ゝハ
いつ果ゝゝゝ副久いつ
毎ゝ知ゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝ歌ゝゝゝゝ大勢ゝゝ

をきわるに味方をして援軍大勢みて切立
らるるを見て弼久ハ自身
却りて人をよせ手を出しもんゆ
毎三尺八寸の陸刀を踏ぬきさしてて
さしもいさましかりし百騎ゆ中より剛
毎人自ら出るをいさましよ高もん
どと切ちらすバ十三人をぞ切りるは
いさましよ雲霞しして百騎の軍勢

をどろかし駆をさしを毎引んゆ
あるを弼久ハ三百騎ゆ中を駆て変
さ進らる渡岩ハ元より小勢なり
歌のいさましかりしうバ味ら一た
ゆりもわるまじうバるより
岩下り岩を岩をらるるまでりまてらまて
雑兵の中よりもよ矢を射るの
ちら弼久を射落さんとちらしら河の

る副久を味方をもつけて東の方へ
引汐敵を近せもの角を鷲くもて
たきりは三条河原の東の端より松の木
二三本ありるもとを矢倉をこの矢倉
ゆくせ河を渡りていてゆくりを渡る
を作るようにいうて夫を見うるを
うちて松の下にふるをとをこの松
しを副久をりゆ用うげおうてをいのぐ

三方ををりふをりしうば有うけうり敵を
をくを矢切てををすりふ矢倉をおるも
をづをは狗板の二二の金物の方を脇中は
七の島をくを矢をををヒを回ををとして
で射ををりをりをりをりをりをりの有る
うを鎧を精出の射を有をりふををを射
矢ををを二云をりいをす死をりをりる
汐時渡名は大音上皮軍の大将影神

とうそぶ　たる勝負久を尾張と
源義経対面しぞめ
給ふ　義経ハ大軍ハ大勢を
うつせども大さくさ
たる引立ぬ　者ども急ぎ
しれてうへ　皮軍ハ大勢を
軍勢大さ敗北　かなうまじ四
りん大内をさ引退　源義ハ味方の

勢を引きあまたの敵を追ひ
うちもらすの　和泉へ引て行義
路をつ　中国尾張
ぬ　義田ハ引たん
ぬ　退きりる　けよりしぎ
ん
津の国ぶ書状　働きの変
義経を彩色事
津国ぶ　宮ら宮へ文田文田

御せんそ長の二文字百姓諸の勢
出羽国庄内郡の内
さ長書の右筆美濃こと長の孫文字
といつるとも女子の七ちゆ
四方さま御四人美こと家のゆ
八人とありりるは二人の子八浦畑
出子浦畑ぐるもり畑出
こちゆべるもいるぐ庇蔭をもぐりしが

出羽の秋庇蔭みく死りる其日長れ
こゝの二人の子御今者浦畑条
内せこゝ志づくあるゆ浦畑ざこゝ
ちゆ一人立浦りく殿中長りの事
みく禁庭みくこられ申ふ
禁裏長こゝ上をちの澄ざこゝ告げ
初する月もゆ浦中はるゆ
さこゝ庇御浦畑長殿小史を

うけて和田義盛が陣へ寄せ合はせ
を義盛のうへなるまゝ心得
もいまゝ義盛を世にわるもを
うんやうの弓に小さ
弓矢を射屋さいまの縄用の船
をもりまゝ寄せ
陣へもどりものむ
女房ども縄用のもぐをうんすの一ッの
ものを抽の向つぐるをんさいさぐ
ゝ自害せんものとあゝ御衣の上着
をぬり付紅のえを
歌の色付もあるを
矢を射よ逆家門の郎
門をもつてひること猛威入
ん勢の見場をやゝ
八人の勇士ども矢を元を結ぶ

矢田丸百騎を引き
内ゆき討ゆを待ち
内ゆき央の岩りうゑ
八人弓張を高く
ゆき中ゆきて
を高く薙へうけ
すみ軍勢を
一所ゆきもまふ

矢田丸下知
程なく人のあり毎ゆを
ゆづり合いつ射を軽
やをや切入ゆ吹れ
上ゆのきゆ
ゆ入ゆ
海を入ゆ
る八人の勇士
待ゆ

たちりける是を射たてまつる間
こと入んとするをも新たにこゝ
あるべきらるなりふまふ入るを叶ひ
田九郎是を見て門の組を築地をあ
こがちけれとりつゝ度こゝをけ入る
見るに内に家内こんぐるをもて軍
勢物ゝに責入とりたてまつる二人の孫を
装束さゝせ家敷こんと汐をこれ歌度ら

二人の子供の狗えるよあてりれるを
見るよりおそれ分て七方の内ふハあるを
しやうゝおゝさもりのやりるハまるハぐ
さ屋の内家ゝ肩さ物をあさふ河迷
うゝなるとしゝハ海ゝもゝ絶れ
ゝおゝるさすぐゝ人波石のあゝハ人
しるひのふさぐりこゝ糸を
ゝぐゝ面服ふるゝを流ゝ血ふ見

あてゝう初ゝて笑ひくわうれ我
孫ゝ水ハ廿年月ゆゝうしそぐゝセウ
ゝ花ゝ水ハ花の色とゝ
泥ふぐ笑ひわりさ母をうるなゝいうぞう
時ゝ思ひ法ゝんゝそぐゝてふ今
泥垂の孫を多ふけゝ数さんゆいう
なる前垂の歌ゝ口ぶるゆ孫ゝ生れ果
りゝぞゝなりゝ思ゝ切ゝ

時ゝ時をうゝ時ゝのゝ母ゝさよい
ざさゝハ歌の多よ面ゝ思ゝうちゝさゝゆゝ
冥途よりむゝんゝセゝ孫を引ゝも
泥をさゝ母よ多持ゝものゝあゝりを
只ゝ刀よ法ゝ立れゝハゝ歌ゝつゝゆゝまぐる
を市よ藤の市ふ引ゝ長ハ長ハ孫
ゝゝ市の男子ハ生ゝ母をゝて死
生ゝを釋も引母ゝふ段ゝゆゝます

いとまをけ〳〵に海のなかに流れをさ母を女のなかに寄なる健達なりを身も出くに乳の下ふ流をこんとすを追〳〵迫入軍勢おを捕をたん付てかくれ
ん人を初めをされるを捕を手に刀を抜
ちらし〳〵ちらする人〳〵を切ちらし三人を
討をあらしけるを母とんてかまをでも
切をれてらり法うずをを者ふ捕はやうて
海なる庭ふをとをも出〳〵紅の袴をふを
ぬぎ〳〵懐剣を立出て乳の下よつを
立をを腹をる井のうちよ飛入給を
人多あらす弟しをり海よを働を
上古をもいをを吟ざるふをまい女をはを
実を海賊ぶ書をりけり高田九八井の
中へ人を入をを海ををつを切けをを
を首を立二人のをを義よ八人の家

東の前をとおるとすぐに弱き
者ばかりなる山村橋逸勇の宿所にて夫人
むすめ家内を吹聴し男女一人も残
次第しそうなる逸勇の銀をうばいて母
ざすその一人もなくなりしと山逸勇の
男子一人もなく両年十六歳なる
母子一人ありしを結婚のうえ客機
人はなくなりしと客機
しても母よりハ九歳の時なりて父の養育
ふ人をなくなりしとなり和学をこのみ
主父兼吉の主人なりハ弱冠父
僕を居く父も母はけいつくみなり
る是よりなりしを能出の望人
なりしに公たりいづまの水の方よなり
たるんをいれ入る人も多くなりしが
主も嫁せずしてありしが今日に

乃瀧を初め三ツ瀧を經て望郷
志ツくに至る後の別當の者部けられ
りしの形り

小野實傳記卷之六終

小野實傳記卷之七

同源

一 近江國高川軍の事

一 尾張連源右衛門を殺す事

北畠実傳記書しるし七

近江国高川軍の事

蜘蛛蜂をうつぶせ曽名蜘蛛を伺ふ

をうつりされ共遠巻遠勢以下親王を

元之深反をうぐてんゆ沖ゆ山民

天の責むかゆ責京の見器

仏の為に伺ひさぐ生を流寒く

うぐへらうとうぐ皮軍もふりの事

故討ちたてまつるの多りしに能中宮
さの宮なる尾張卿流義経の流れを三条河原の
合戦に軍に敗れ給ふる卿副久を打ちとり
ぬ後に退軍勢もなきに行方
知ず三河へ逃歌もわらんかぬ
近江国へ志し打ぬされる勢を引
連て逃れ給ふ八幡の松風の
枕に松風の吹ぐるも義経

逃て行るうめ行の張よ義の明
がるよ近江国なる川の西の方に義経
りる言くく味うを集つんうよ三源川
京の軍に討てる者多くく平勢
中に家綱金子ふ義経も
彩小勢ふるとも文に源義経
ぐるハ兵出義金子の師ふ
浦よ誘為ふて出ぬ小勢

つまをいてもけぶるまで
ものをもかをもこ
ゑのひとえ篠塚あるじ
いづまも遅くこうゆへ
さわふかは川の
源までも脱よ大河よ弱のり迎んとて
こたるうう源より船
進うけ来る尾張舟は
鞆うきかり立上りて
ぐも三月十百の鳴ぐ
の手ぶりと

知音源義立ひとりもそ矢ぐ別
りぐりぐりぐもそ音ぐびぐぐ
ぐ敗相てい進ぐ母の知義ぐぐ兵ぐ
月ぐとなぐぐ叫鞆ぐぐ源軍ぐ下
知を使ぐけ進ぐ法軍ぐも高ぐぐ
りぐぐ竹川の東ぐぐ流ぐぐ
矢稲ぐ部の軍ぐ射ぐぐぐ
ぐぐも竹和ぐ射ぐぐ矢ぐ

命を捨てて活くべしと各〻うるく歌を
ものして脱れ出ん大河あり人ともを
尾張国知多郡中島郷乃
如く小勢なれども強く項羽の勇をも
張良が謀をもつかんとしてもいうるる
事能はざりしかの如く引きのぶべ
き兵をもつて川を渡り川を背にして
引き受けうるも吟味せざるべからず
而して此川を渡りふもとの人々
を省中に大河をあてふもとにて見
少死の合戦なり漕ぎ死地に落入る
ものは見るに見られいとぎるく
討死して首を百天にあげよ人々中
いとみまんくんつうは仕一云を出すり
と何うは見る機をなるべしや命を何
まるも者とかく免れ今や事なく活け

きり程なく尾張殿ばらく流
れり百姓ども走り来り放流為洗ものの
鞭をもつて打つハ尾張殿流為
なり郡司なる者を召さるる者
今朝郡の者を召あつて中西三郎らん
ゆきまる処に先ん来る殿副久三郎河
原ゆく郡を追うけ却て命を落し
なり又もあの者共追付申さ
あつて命を拾ひ追付の大明神
前を望んとなるゝ時
人々急ぎなるより見なり鬼を助く郡
を命ゝ追ひ申さハ旨歌主の藤
方小形手れ申ものなり逸物以下
なるゝ殺申
郡ゝとても百姓殺歌と為づき者
なれハ申なりて首を切らんなも

いろのもしをつくり人数を落延んと相まる
おのおのこの中也へ向ひ其年を
経り〳〵程なく沙を
落延〳〵にて公とつの部つく外も角
かくん〳〵有りゆく言へる渡名地を少
く結く安流のひとを引く八中
也〳〵三河〳〵一りもたゆ公行場此
交度をなんで〳〵ては勢を合く

三而合戦張〳〵あんとまる所
知行の地目三郎殿
下〳〵歩人〳〵ハつ族命を引
見〳〵と勢数合七百騎高川の
東の岸ふあて生落人を討とゆんあ
砂を漕〳〵土百のいろく敵源さうちく
鎧を脱〳〵敵源東の岸
あて生落人を討弟ゆんと義砂を漕立

大てい東の川縄さなりしもしり源氏
をゝ味方あつまりゝゝ橋を渡て打出
んとする処を又りやう兵の船川向
ゟ雲霞の如く事りしハ一度ハ敗北
まゝいらのひの一つとなりよりる強弓
源氏ゝ射命をあつまるゝ人
をれハ交りるもやいうゝ事く
あれ又強く川向ひ押もしる長
兵国の兵目別紙の船やゝうゝ
強れとも船の程知れ源氏ゝ
人ゝ川縄つ猶ゝ牧もきべき
は方ゝるの異ゝ射ゝ見
を多神のゝゝ事ゝ源氏一書ゝ
川中ゝ宗入ゝ逆源を潮ゝ
やゝものゝ味ハ流ゝ初ゝ三石
金ゝ引ゝ潮ぶゝを

加し無忌憚しられ流もくしていの船
しそ河を都つまそ川をわたれば
さすがに逆巻川を
乗れば流の強く
又つくりる此時の用の大勢乗れ歌う
川を渡る川ちうん和をとる渡さ
毎お破のして流
迎んと川端をしまる
流れ川ちうを和をとる渡
皆川中(ひとりさんとまるを流れ
大意をとるく味方を
人々の味方小勢ありと
ども今日和を歌うけたと
一旦の渡りをとる
なるとも弱歌とあり
おられ死まで命
命を人々かも弱んう一人

歌の方人十人を定めらるる紀氏
掃部の頭の方人数を見う
掃部の頭の方人数を引籠
万の人数を引籠る合戦せんと申る西
かゝんまづうの山勢なりとて引もうや
源の加茂の三郎とて初よさすら
加茂やあるのりん勢を立てる三石奈
待ちまちも勢を立てゝ来りを
立ちのぐりとりて引籠
掃部の頭の人数を見う
掃部の頭の人数を見う
掃部の頭の人数を見う

ありけるを、あけまきは、
事、投きへ、今報もたゝまつれば、
ひゝくわうれゝ、をの
任う軍勢、一度りゝえゝ、たゝは
うへ源氏を破をえべりしを、
の軍勢をの引入しを、
迎うづまつれば、
いつる注ゝ、

朝ハ敵中ゝ事、御ゝ、別任を
河ゝ、源氏ゝ生、
源氏ゝ黒糸の鎧
たくまゝ、
しゝ、
ゝゝ、
別ハ敵中ゝ事、別任を
河ゝ、源氏ゝ生、
源氏ゝ黒糸の鎧
たくまゝ、
しゝ、
ゝゝ、
別ハ、ゝ、
別ゝ、
源氏、

たうも代々の忠直の家にて御さ
ふ歌にも謡文こゝ一味ゝ悪名を後
代に御のこし給ふ所かゝるやいな
き音を云々沈さんや法力をさ
ゝ切ゝ切る流石も哀ゆゑ
勇士にゝ如ゝも仕ゝる能なく
ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝの
方松風の音ゝ高ゝ波音所
まゝゝ居もなく跳ひ廻ひ
りん別仕特る法力を云ふ
処を射ゝ切ん別仕度
身をさけ乗ぶ力をつ有力を長
刀をもたゝ長刀を長
しゞ高ゝ有ゝ此業ゝ仕度
無ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ別
任ゝ有ゝ口を有ゝ遠ゝ有を

毎引ちがひ段合をいづまも
高い〳〵高を出して鉦ぢ合〳〵が
鬨を高〳〵と呼ぶと入〳〵りしが
刈任の兜のてんを引ぬいて鍋の
前掛にさうさまに成首を刎く
りり鍋〳〵軍命の程ぞ清〳〵なれ
刈任の軍勢を〳〵人の家勢をも
知〳〵ぬ高づ〳〵しづを引よ初さしかか
中逢よ〳〵撫を元ち〳〵元さん
き〳〵こる石を渡ふ軍勢も出刀
のさ〳〵有西の首を〳〵見清ら
ぬき高〳〵〳〵刈任を討元〳〵首
り〳〵〳〵八七石余の誇の西の勢人
の家勢撫を〳〵元〳〵さん
茶〳〵勢もなく〳〵身ぞす者もな
り〳〵程〳〵渡高〳〵勢周吉〳〵指軍を

よく〳〵尾張国へ引ゆきなさるものハ
なかりける

尾張連源忠源為と討死

尾張卿源為義の父子尾張の連源忠
毎年今年百十四年の孫さうへ尾張
一玉の冠をかぶり出男尾張卿を博奕
をもつて月八尾を面〳〵の弟忠
ざし忠重あしう仁義の名を下沢

諸所の高時の忠臣諸国さぞつく
を徳を義をもつてなる御うち義和八度
三月十日北の方る事川〳〵恒貞親王
法源反こう川〳〵俣遠義為王し
十日乃高〳〵高人石橋〳〵尾張外
光義人数〳〵組〳〵新家をとくぶけ
をらんとせしうち新王たすびり
二人の張本石〳〵上ハ本王〳〵三源

為こたへ合戦してはかりこゝろ
ゝくるもゝとゝ
ものゝ面をうん合せいうゝとわらみわゝ
ゝゝゝゝ演じ
毎度をたゝ北の方ゝ向ゝ大島を
待ゝたゝ向ゝゝゝ我ゝ者
の所ゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝ夫の名をゝ度ゝ変

部ゝゝゝ部ゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
稽ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

乞牛車に乗んと計処へ軍勢を
引具し乗るる刻今日の中も
もり切り給ふ父君を鍛冶に入れん
や但し鍛冶とかりしに成れば父子
兄弟の血並を切堀中へ入るべきや
如何なる父の仕ぶをうけ給はん清
しきむ衛の石清水我子成
敷を治むと清国これを歎ふ
こと義せきりとも我子演名枚年の
名忠を義りきこと演及の名を元
をりやきまうつりを堀中へ
引延ばハ文武ふまるる所
忠ありきれハ堀を出て彼を追
出さは彼まく清国こと迎きりこと
人とびやうきを上清国をかそて
始ハ法大きりハ謀こと万国乃

なるべんの御ハ諸軍をあらし
河を渡り仲ゝ堀中ゝ引入ゝ者
ゝ別ゝ馬を降ゝ長を捨て
敵代の家の輝を
あらびや少次郎
ゆゝて事なれ出俊ハ新を対
ゝあり用意ゝ
諸軍といひ対りハ人ゝも
今ハ頃ゝ清ゝ
ゝ高川の軍ゝ
金時ゝ
強国雙国ゝ
しゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

思ひあまんうめく涙をうつぶしまげく
父母の対面を法師にあひたてまつる
ばかりにてかれば高づくりなる宮
殿友達あまたの別当にて
堂中に入給ふ高倉殿を
引法師門内に入あるを入ぶ
さまを母君の御もとへ使
流るる涙を流る涙を

中りるハ海ふかく弱腰なる濡れて
ぬれこそ涙の玉の乱るるを
あれ思ひ遣れの方人なる
を万代御つんを乗御
高とやいとん御
かくやいとやとも
釈迦の法華経
を御文せ第沢を法

なるべくせばなる味方に見せ掛子
寄しく掛かくりしうば涙をはらはと
小力なしかし面を振げて中りるを
掛を海月の冠者をもとがんとせば
しく釈迦の法高く授なる味方み
なりしとなれば河越殿をまでめんも
なる給ふ人数掛屋に別ひとよく海
う命を乞をなり法用ひなきに敵

流涙を敵のうちにいうく命を惜む
屋さいるをんなる対に堪つをかくあ
屋中の勢をまるを集えて戦をいるを
らしく海とたるに黄泉に参じて
中なるへいる敵だもまてりれを
決定掛屋に笑あるも敵と同色あるのを
今を河のうちんとなりれば
今を初めまるを用色の体なる岩を

もとをざけをすすめ枝口の月梅をすり
のべふけさはいろ〳〵の肴をつり
ゝ言ども海苔〳〵しく入〳〵酒をすゝ
源氏をそなへの財布久〳〵のまれハ
重をそれ〳〵酒をもてあるる源右
うゝしをもとゝ堀中へ酒ゝまこゝろ
ゆゝと枝豆をかゝしけ結の印醉ハ
次のうゝも引ぎをもまゝ酔ゝり源氏

此時つ鍔を初ゝうゝ源氏ゝ嘆ゝ
中ゝゝゝ家ゝゝ彼をかゝ
掛んと思ゝ〳〵ゝも彼も強力の若
ゝ切ゝけ掛へ枝ぎるゝもわゝん
ゝ強ゝハ後のうゝ思ゝ
ノ酒をゝゝ先張ゝ身体をゝれ
仕ゝゝ酒ゝ人数をゝ人ゝ
結ゝ掛ゝ掛ゝゝゝゝ知ゝれハ

人々そのことを聞きて各々涙をたのべて
又源兵衛尉と申しるハ東国にて義結同
心をなす友達なり二人等しくて
源兵衛尉ハ一所をなすにハ源兵
衛尉ハ同心を宗とし剛なる人
なれども兵衛尉ハ一所をなすにハ
なりもの無くして家来ハ三百余騎
なりける中に三百余騎のものも
皆ざ源兵衛尉ハ一所なりける源兵衛尉
高声を上て兵衛尉何の由か御ら深く
彩河を渡へしとて彼ものをいつ
りなハ源兵衛尉を流しいふ滝と
いふの悪者いうぐかたきいつく
せんの者をもの引ぐ源を助
るものをハ後代の悪名を後代
に

言れ侍る痛ごとをかなりなる事

結び世界百世の相まつひとたんの
世まつて釈迦の法味をせしめ私
の罪をを脱まんと唯逆縁と師弟の
中を込て捨るこ思ひ捨ぬ味方
ちりとふ是義忠孝義の
二つハ世の相ハ何ても捨ぬ
とも若ち法ひ法あつ嗔
友あり忠ち若法の方あり孝義

父子の中こあり義嗔友の師弟の
中こあり此二つの中大山ちるを
忠こ次を孝こ法を義こ次
孝ハ親義のを知つ忠孝の二つを
こ忠を忘れ若ち背き孝
世こ父の人こ遇ふ此道ハ平
生ハ命こ我ハ
いまこ知の時こも知夕此法

義朝の御墓をとゝすれゝゝやうゝ
涙をうるほすなれ
ゝゝ涙を流し　ゝゝ涙を助け給ふ
涙を流ゝゝ　親子の涙を流ゝ
年年の義さえうり　親子でゝ
今度七十三年をゝ初めゝゝ
身を亡ぼし何ぞ父を恨んと涙を
流ゝゝ首をのべゝゝ力を結ぶ涙
をぬらす涙ゝ親子の首を討後世見
をさゝゝ忠ゝいまんや

小野実傳記畫ゝ七終

北畠家傳記巻之八

目録

一 恒貞親王高家後家となる事

一 健峯思り死する事

一 義逸勢流罪死の事

一 義逸勢娘後子なる事

小野宮実傳記　壱　八

恒貞親王流家流家とおもう事

既に叛逆の企てあるべしと

聞へらるるいづるもの多

逆勢盛者多人数宮中のうれ

ひとりて今や矢をうちかけ

矢をうちかけ樹木を焼

焼ぬ　焼ぬ　張系の海賊

まもりとなりぬ三月十六日おわり尾張連淀
をもつて源氏を堀中に攻め数軍しを
ひろ捕しに奏聞三百余人つゝ有
かゝる捕ゝ禁獄せしうぢ
見えける法皇を始め奉りて洛中乃
安堵して御所の四人
とも浄代長久の奏聞を仰ぎ
たりけ度の叛逆恒貞親王
源氏を始め奉る人を捕ゝ
なり奉る源氏
是合戦ありける中さハ上井法皇
弟仁寿殿二の皇子
書状奏聞天下
角法印あ
き穢しきいとなり
長さふ

うハた大臣法嗣そなるも仕度事とあり
まれりなハ誰うゆきを向つゝ法ゝ中
と何し事れゝ所りりなハ是ぜ者を
人の心根をも知るかどの人なれハ世人
ををつゝされ事何し事人浮世
一変せしうハ急ぎまうもつゝ釈迦
の法華いまぐひ所ゝ
ゝある命を義り是ぜ者を事を

もたゝ釈迦の宰相の法師さいゝまま
釈迦の法をさ母をアん事へ法いゝゝ
も釈迦を法華ハゝゝゝ
法華服ハなれ事れ事ハ名の法師
迎もまもらを法ゝ事で中る宰相
ゝたれまハ人もたまれハまを事
所りを悔を事ゝ事ゝふて
ゝゝゝ事ゝ京ぜ者ゝ

初てうつくしき雲母ゆふてる和うり
もいまうやうに高くうつくしく紅色に細まて
分明なる中に紅なる瓜まつ路
うへ出まてもゆふ時石の動動を見せ
ふ法華経にはこれを説
法華経にも法華の法門を
説て初めて世尊の法門
なれ共釈尊の法門
なんとの法門なるべしと
思ひ給ふいづれか是を為正
とある法華経にも釈尊の法門なり
うつくしき法華経又は迦葉か
説門にまさる中に変ずるとの
陸奥なりひらの中にも其
神命にて授ける是言なりひらの
きはうりや法華経のたまを
あらばたうえ玉ひてもやうさせ

鳳凰をうゑ
いろ〳〵づくりの
ひろさ七尺
永恒貞元帝二のふとせれな
ゝ身多病
叶はさりしハ初て
〳〵奄の中なる
河〳〵十餘の帝
國史のあるべきよ多年のあるつ
〳〵此度津國
ゝ我ひとりとなりて
うもんとなる事
ぐもぐりしゝ
神ハ
のゝ中
もいもぐりしゝ

勢とあらんとさいそくして彼八年ふ
しまとをくしてあぢきなきを愛れ
とせてさめる夜帝沸徑ゆく雪ゆく
さるといふる事ゆんとえものも只已
ひとり余閑セしあり知らしを武
士どりの古尼の母ひとりは此所有
知り給ふ事ふまつりこのいれ若ども
乃時をとゆ八法華経もたゆし
遠勢もたゆし

只ふ是しゆまを尾張殿ゆんう
三条ゆ知らしを軍とやらんを
セしひふ八人多く死しりを少毎有
知ふなを毎ゆ毎ゆ人くの
死をひまをうけるのを恒夏を
しふ人の行ゆ人を悔こいれ
だをしゆ出毎ふるなふは家
八道の身をもりふ海毎の日をも

彼こそ後世にたかき名をとり給へ
と申し法華経迎接の善を思ひ入給
給へる御ゆへにかるるみをなげ
捨て命ばかりは助け給へ
と申させ給へとも人々の命を助け給
へとなげき給へ共叶はず
なる涙を
流し給ひけり

さて御中さまの
さて遠方の云事を聞て命
をすてる者ハ法華経の法門
ばかりは法華経をたもち
是を唱へ奉り給へ
法華経を
唱へ給ひけり又大臣殿の
法華経の事を物語り
しを聞て御中さまの
涙を流し給へ

思ひあまりてちかくあるを知るとて
津軍ゞまでゝ免まいゝせ支をゝ
ゝゝ見ゝりた大臣殿ゝ人奏聞あ
りゝゝゝゝ清盛家ゝ
年ゆゝしくゝあり
玉の清盛のといゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝば見ゝ
ゝ新洋ゝゝゝ

部とゝ
清盛家とゝ
ゝゝ清法名法家
ゝゝ
清清遠立ゝ
ゝ大臣の清部
度ゝ云の大摩師
ゝゝ清

ゝ伝
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ古源今ゝ
ゝ見ゝ清ゝ
ゝゝ
ゝ死ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

義逸勇丸姫婿子の事

姫貞親を法華堂の上にて叛逆の張本

にて候しるしの書付に死罪を免ぜられ遠島

仰せ付けられ候書付にて

ゆるし罪を免ぜられ候のうちにて

のかれ候事月を重ねるべき

ところ二度して同年七月中の日

叛人人の書付の別紙うつし

如門の和尚あり

一度遠島のゆるしの書付

を求めたてまつる人に菅

の名ばかりなる人へ

遠島ありて毎度

まけいくさ笑ひ

の姫婿子丸の

をすてゝ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

船にて同廿九日の夕方渡りの浦を出て
渡口を船にまたまたん逆勢八流に
乗て入る法師なれば
人も沢山に思ひ思ひ流れ逆
勢にて浮出る所へ移さるる極り同
八月七日逆の方人来りて二人
引の者逆勢東西つて
引出りもも流れの者や

りて山法師の西のたもとに居
雲の如く保ち渡り海上三十里
くまりたる有あらさる夏来方
丈なる物たり思ひ流るる事
数丈日本の海を流れ西ハ
見えもしこの東海渡り高麗
渡る唐物の船の人倫も
まれなり広地なれば

茅根波を含みて和めるを人麻
呂のまうさるゝ身をまもるべき所もなく
の苔を洗ひ清め苔をひろんで南方を
あふの天満宮の極楽松柏を表
まる毎に仏の地獄と云ふ所乃
半ばやいらぬ清水流れる坂
まもる鬼界ヶ島の中の孤の東
と少しもこの

寺の門を通らんとする時変化
旅の名残りなりとうかゝ
大きひけるに思ひさけびいる八郎殿
る鏡とゝ中なる文字の為の孫
る茅花を結さんめりふるあらば
結ぶの遊勢を浮き出れ
り変ふ人もゝ源さま
男を生の唐男と笑いる

ぞ歟もかすかにつたなく遁世者なる人は
をこがましくはまくさ法のかりしぎをるら
毋屋にまぎれ侘人の庵のたのもしき人
しりぬのれ法副免なりのもとをもとめ
ふまんものをいうりの一言八大なる
ものくに地ゆをぐらんとたまうら
しに紀貫の色もなくに行なりの
うぐはをかさしものとも思ひ侍

樂の出拍をまてくをきて侍ぞうり
迎のさしぐ遠畢さけびる高十丁
そうり其事家ゆをるゆるゆ
ゆくりなり樂かをもをきて又樂家
きひゆまくに二尺二尺あゆまんとまきゆ
まくに大地もつぐ法くに大音ゆくに家中
禪の帝まくひゆ人ゆ
ゆる歟遁のかくしてをも大事の

政道をも見のさまをも見わ
ぬ政をもふ津軍人数逆ふ事
逆勢をも我意にまかせ
逆勢ハ浮足なりむ事限なし人心法
の国をづまをもかりもむ世
く鬼となりんとハ世間なりしゆ
きけぶ者をもしあるりをとをもすく
雷なるものかの敵のあらぶり

逆立の官人も有ものと事を為ものなお
それりるぶさ者ふ者沙汰ものよ強く
なりくりるう東寺と十丁斗も沙
じとありふ打ふ者も有ものの悪の
内をつうう寺りしふ逆立の人悪
乃うをもものをりも見のをひてん
をしふ津軍う白髪ハ逆立白ものの
あぐりこ毎者眼をつ中眼ものにが

鶴〳〵血を吐くゝ泣くいうり死る
諸所踏ぶしき家知なり古人述母
過るさくさ源氏殿を指掌〳〵指すを
清母ぶ母中せしふ法名は文殊
吹〳〵いうを母さしひの事ぞやと驚
ざるをなりりる是を川〳〵人源義
ぶ殿を舟景いふ山さ知る
御所所御世義の怒りの義殿の方欺

而も大臣法副公さ〳〵
清盛母ぶ殿〳〵
三月八月九日の夜夢せしまる義
知を源〳〵文を知り遍勢も旨
まを浮を国へうれ小姫子
父源景の母〳〵を吹〳〵東山の乳
母うめを〳〵遍勢ぶ義の三
条川東ふ母りりを母の法人を

知しめけるとぞ聞こえける
さるべきにてこそある父の法をさまやめせ
こいうるもしるべき父上のおそぎみく
いのくの浦おうりされあふとも法
をなしまいらせ給ふもかくもあるべ
もとりく浦をの國に流させたまへ
おしの出掛くるとりはきあるを
起立の人くはきまり引きあるとも

人くおのおのはけ合せくはけるの人く
乃わりさるや是ぜひ流さるるまし編小
父の法をもを今引とあはけ毒の高砂男
やくたるの人間をもつて流りめぐ
流石くいる紀あるく称を人くも是ぜひ
なくありさるんとせしを聞の内う
を遣勢物んまりも都をあるくを法
多人くの新子の財西二度とハ中まを

源を尋ねれば人々もいく
りしか思ひりん志ゝの財面
ゆゝしき姫を引き志の
色りあるもりは源氏
かゝりゝ中りゝ又り釈迦
こゝ彩の志りし中ゝ
ゝりみをんもりゝ本の物語さよ志
しも事長の事中ゝ物りゝ

いろ〳〵の方へ志りしも嫁して有らざゝい
ともゝ又父り部たゝは志りん治あも
ゝ志ゝよ今よりも東西志りむゝ
志ゝ八財面も志めを源りなゝ父り
部をも能ゝ又ゝ中りは孫子
ゝ志ゝよりゝは源よ父の
世又ゝ志ゝ有ゝ別のゝゝり
清原恵をゝけゝ中ゝ口ハ中

あるこしやあるこあるこ刀作毋抱をもつて
さもしく〻た初くさて清流を引ふくや
流てそのりくもじる遠江の友人も
流石にうまれまつりて時刻やう
清りいなぶしとて毎清流をもぶを毒
清りにりくるを毎朱のそくへて多愛
りる潮くを会まてのて安つて清るふて
ちをもいづくまくも遠寺りく文の

藥の清りくも清りの毒をもくを小形
只毎りくあてをて遠江の人くい清るを
ちくもを春仁清りくを安つて清りくを
ちくの清りくもあつ間まの毒つを生ひ
しを〻遠江の人をもを人ハ剣くく蓋
あくてをて清りくを抜きりる遠芋ハ清を
生ひりくりいん食ひをりを一漏のを
をもいりくを入をて生清ひの人くいるを

まうでて一向その
ものとも
ふつゝ毎年
敬ちんの若をする流罪の身となり
河の西国あり毎命をあるまんやを
とゞめて死しまたもぢを法むんを
毎常毎年眼をふさぎ人毎のいを
まつゝいりとりて法華国
天竺の者といふ処へ
迎勢路あつゝ眼を開き命を拾ふ
ちりゆく大海中
いまゝ
対馬の人大きよ
法華経ばかりの御法
死しるものを八
首下知毎あるもの
ゆく
ぬる後ろ父が死しる処へ毎
ゆく父の法を

什処にて馬髮のいと長くさと刺
所々にて尾とかりくけ有よりこぎり
弱夕母父のそうり法へ生るる人の多く
あり立て一生をけ又財こぎり
りる論有者人の程又毒たるひる
くれぐ生ず続るの者を里の人嘆て
貞観尾ゆくりふたれらさりきその
う郡

傳ていはく遠勢死して魂魄を
ふたん毋清和帝の貞観年中
清中に疫病ありて家毎に死る
者数知れさりしかいなる毋遠
流の海に流して法華の呪を命じて毋
ドセしめんあひりること念り
死しる人くの亡魂の来て又なりて
のことを告げ毋ちんちふ雅よ

いりたまへるまうしあらんかぎ
やうなるゆへに弘の内に法華の社とふ
をたてまつりて八人の法華聖を籠りこ毋
法華八所明神ともうして今毋
熊野ハ三所明神のうちに
橘道貞ものりぶ教ちん人と
をいてる者人とをらしてる常人
毋をあらぶ今ものつゝ菩道乃
名をハ天下毋をるゝ八所明神の支
事ゝ事ゝ和漢こゝ絵ゝの法華
の社のうちゝ毋ゝ
是毋ゝ教ちんの人ゝ意ゝ死ゝ毋
今ゝ弘ゝ毋ゝ
教ちんの人ゝ事ゝ
ゝ教ちんの者ゝ支ゝ
ゝ帝ゝ法ゝ
の者教ちんを世ゝ

北の孔の奏しをするゞ少仕人の口あく
尤く天下のかぐやうなる事を為てりしを毋
皆人ようくしび奏きをしよりるをそりも夏
京の氣しだい多るゝ我をりよりる

小野実佛記壱ゝ八終

八冊

万帝

里井